

## 総合表現（オペレッタ）における授業開発Ⅱ — 領域「言葉」「表現（身体表現・造形表現・音楽）」に関する科目内容と オペレッタ制作との関連 —

伊藤 智里, 秋政 邦江, 青井 則子,  
尾崎 公彦, 入江 慶太

### Faculty Development in Operetta Class II : Relation of the Subject Content about Content “Language” and “Expression (Expression Using Movement, Modeling, and Music)” to Operetta Work

Chisato ITO, Kunie AKIMASA, Noriko AOI,  
Kimihiko OZAKI and Keita IRIE

キーワード：総合表現，言葉，身体表現，造形表現，音楽表現

#### 概 要

本研究は、総合表現（オペレッタ）授業における授業開発の手がかりの一つとして、それまで受講した科目の内容がオペレッタを制作する中での学生の学びにどのように影響しているかについて検討する前段階として、各科目の内容の関連性について明らかにすることを目的とする。具体的には、オペレッタに関わる以前に受講する科目でオペレッタと関係があると考えられる12科目のシラバスから到達目標における表現に関する重点及びオペレッタの授業内容との関連を明らかにすることを試みた。本研究で、オペレッタに関連のある科目の到達目標について、表現として重要だと捉えている要素に特徴があることが明らかになった。そして、授業内容において、関連しやすい科目があることと、各科目の担当教員がトータルプロデュースについて意識している様子が明らかになった。

#### 1. 緒 言

本研究は、総合表現における授業開発の一環として、学生が総合表現においてオペレッタを制作するまでに学修する科目の内容と、オペレッタでの学びとの繋がりを探ることを目的とする。これまで筆者らは、オペレッタにおいて表1に示す自己評価チェックシートを作成し、学生の自己評価と教員評価の比較・分析を行い、学生の評価と教員評価の間に生じた差異について検討した<sup>1)</sup>。教員と学生の評価には、コミュニケーション、備品・施設の使用、制作上の工夫の3点において差異が見られた。自己評価チェックシート作成の際に筆者らは、総合表現という科目を、保育者として必要な知識、マナーなどを含めたものを総合的に学修す

ることができる科目と考え、総合的な視点から自己評価項目を選定して、自己評価チェックを行ってきた。そして、教員と学生の評価の差異を検討する中で、より具体的な項目を選定することでこの差異を埋めることができるのではないかと考えた。そこで、授業開発の第一段階として、評価の視点を表現についての内容に絞り、身体表現分野に特化して自己評価を行うことを試みた。身体表現に関わる授業内容の振り返りを詳細に行う自由記述のアンケートを行い、学生の自己評価を分析した。その結果学生は、言葉、身体表現、音楽表現、造形表現を分野ごとに切り離すことなく総合的に捉えていることが示唆された<sup>2)</sup>。

以上のような経緯により、本研究では第二段階として、自己評価チェックシートの「制作上の工夫」及び「省察」に注目し、授業の技術及び知識に関する部分の統合について分析することを試みた。「制作上の工夫」のチェック項目は、「効果的な指導の取り入れ」「テーマの表現」「表現分野の工夫」の3点である。

（平成26年10月22日受理）  
川崎医療短期大学 医療保育科  
Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

「省察」のチェック項目は「既有知識・技術の活用」「客観的視点の保持」「自己表現」の3点である。「既有知識・技術の活用」に「これまでに習得した表現知識を活用したか」「これまでに習得した表現技術を活用したか」というチェックのポイントを設けている。各分野における知識及び技能は、各分野特有のものであり、総合的に捉えるために必要な要素は他にあると考えられる。しかし、各分野における技能面についての指導が最も形になって表れやすく、技能を向上させることで作品の完成度が高まり、自己評価が高くなることは明らかである。そこでまず、各科目で学修する内容をもとに技能面、既有知識・技術等の活用の度合いについて調査した。

オペレッタは、身体表現、造形表現、音楽表現のそれぞれの分野の知識等を総合して活用することを学修する科目である。そして、オペレッタを制作する際には、言葉、表現の領域に関する知識、保育に対する知識が不可欠である。各分野の担当教員は、オペレッタに至るまでに、様々な内容を取り入れた授業を行っており、学生は既知の知識を総動員していると考えられる。教員は、各分野で授業計画を考える際に将来的にオペレッタに結びつくことを念頭に置いている内容もあるが、各科目の計画的な連携は行っていない。実際には、どの科目のどの部分とオペレッタが結びついているのか、また、それぞれの科目で修得する内容に共通する部分がどのように存在するのかについて、明らかにすることを試みた。

学生への授業効果を研究した長根(2004)は、オペレッタ制作を行い、作品発表までの過程に見る問題点を「能力面」「人間関係面」「表現面」の3つの視点から考えている<sup>3)</sup>。「能力面」に関しては、「学生の経験不足と勉強不足、苦手意識と自信のなさによるところで表現力が発揮できず結果に現れない」ことを指摘し、これに対して丁寧に支援をすることを指導・援助の方法に挙げている。「人間関係面」及び「表現面」に関しては、「互いに言い合えない力関係」による「やる気喪失やグループの分裂などの不適切な受講態度」が出現することを指摘し、これに対し、個人の能力を上げることとともにグループワークについての援助を行うことを指導・援助の方法としている。

長根の3つの視点を本科目の自己評価チェックシートの項目に置き換えると、「能力面」は「効果的な指導の取り入れ」「既有知識・技術の活用」に該当する。「人間関係面」は、「双方向の話し合い」「情報共有」

「他者理解」「決まりごとの遵守」「(備品・施設の)利用時の他者への配慮」に該当する。「表現面」は、「テーマの表現」「表現分野の工夫」「自己表現」に該当する。これより、本科目の自己評価チェックシートの項目と長根の問題点の視点には、類似する要素があることが分かる。「能力面」「人間関係面」「表現面」のうち、科目の到達目標に挙げられ易いのは、「能力面」及び「表現面」の2点である。「人間関係面」に関しては、学生が活動する中で気付いて欲しい事項が主要素となっている。関わり合いの中で経験し、様々な感情を味わい、その中で大切なことを身に付けていくべき問題であり、本科目に至るまでの履修科目として具体的に到達目標にこれらの視点を挙げて学修するものは少ない。到達目標として組み込まれている部分ではなく、体験して気付くために、様々な科目でグループ活動を取り入れているという方法が、オペレッタのグループ活動の前体験になると言える。そして、「人間関係面」を到達目標に挙げている本科目は、保育士養成のカリキュラムの中でも他とは異なる性質をもつ科目であるとも言える。

## 2. 研究方法

### 1) 研究方法について

本研究では、オペレッタ授業と関連する授業内容を選定し、以下の2つの項目について、選定科目とオペレッタ授業のシラバスを元に分析及び考察を行った。2つの分析項目とは、①表現として重視していることの比較、②オペレッタの授業内容と各科目の授業内容の関連、である。

表現を通して養う要素は複数挙げられるが、表現方法が異なる場合、全ての部分が同等に重視されるものではないことが予想される。そこで、どの要素に各科目の比重があるかを分析することで、総合表現への連続性が明らかにできると考えて①の分析項目を設定した。①を分析するために、具体的には、選定した科目のシラバスの到達目標から、オペレッタ授業の到達目標にあるキーワードに合う言葉を抜き出して分類した。

②の分析項目は、授業の具体的な内容の関連を分析することで、各科目で修得した既有知識とオペレッタ授業との関連性を明らかにできると考えて設定した。②を分析するために、具体的には、選定した各科目とオペレッタ授業の内容をシラバスから抽出し、関連付けを行った。

## 2) 関連する科目の選定について

本学のオペレッタ制作は、今年で7年目である。平成19年度より半期開講の「医療保育研究Ⅱ」として始まったが、カリキュラム変更により、平成23年度に通年開講の「総合表現」になり、平成25年度より前期・後期開講の「総合表現Ⅰ・Ⅱ」となった。オペレッタは、保育者養成関係の大学においては、音楽科目で取り入れられることが多かった内容だが、近年、総合表現の授業内容としてオペレッタを取り入れる大学が増えている。この場合、複数分野の教員が共同で行う形態でオペレッタを制作する際の連携方法が問題の1つとなる。本学科では、科目名が「医療保育研究Ⅱ」であった平成19年度から、表現及び言葉に関する分野の教員が共同で授業を行う形式を採っている。そこで本研究では、各分野が連携するにあたり、それぞれが担当する他の科目の中で特に総合表現に関連の深い科目を選定した。

保育所、幼稚園における教育内容には、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」という5つの視点から子どもの成長を捉えた教育のねらいがある。これらを5領域と言う。総合表現は、その中でも領域「表現」に関する科目で修得した知識・技能等の内容を統合するための科目である。オペレッタに直接影響を及ぼす知識や技能を学修することができるのは、表現に関する科目である。表現には、身体表現、音楽表現、造形表現の3種類の分野がある。本研究では、これに言葉を表現に関する分野として加え、表現の技能面を学修する4分野とし、4分野に関する科目を分析対象に選定した。4分野についての必修科目は、各分野1名の常勤教員が主担当をしている。この4名は、全員総合表現の担当教員でもある。他分野の内容について自分の科目で取り扱うのは困難な部分があるが、保育の特性上、活動には分野の内容が重複することがある。他分野の科目での専門内容の活用の度合いについては、各教員は把握することが難しい。この部分を探ることで、総合表現の授業をより良くするための方策を考えることができる。

分析対象にしたのは、「子どもと表現Ⅰ」「子どもと表現Ⅱ」「子どもと表現Ⅲ」「子どもと言葉」「幼児体育Ⅰ」「幼児体育Ⅱ」「図画工作Ⅰ」「図画工作Ⅱ」「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」「音楽Ⅳ」の12科目である。「子どもと表現Ⅰ」「幼児体育」は、身体表現の科目である。「子どもと表現Ⅱ」「図画工作Ⅰ・Ⅱ」は造形表現の科目である。「子どもと表現Ⅲ」「音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・

Ⅳ」は、音楽表現の科目である。「子どもと言葉」は、言葉に関する科目である。これらは全て、必修科目である。保育者として必要な日本語の表現力を身に付けることを第一の目標としている「幼児と国語」という科目があるが、選択科目のため、分析対象から除外した。

## 3) 表現を通して養う要素について

総合表現の基本的な授業目標は、「オペレッタ制作をイメージしながら、総合表現を構成するそれぞれの領域（脚本・音楽・身体表現・造形）の資質を高める」ことである。総合表現Ⅰ・Ⅱの到達目標は、表2の通りである。表2のうち、表1の自己評価チェックシート「省察」のチェック項目「既有知識・技術の活用」に関わる部分で、学生に修得させたい要素として「表現力」「感性」「創造力」「技能」「知識」に注目した。そして、関連すると考えられる科目のシラバスに記述された到達目標から当てはまる部分を抜き出して①表現として重視していることについての項目の分析を行った。次に「既有知識・技能」として、具体的にオペレッタに繋がっていく各科目の内容について分類を行い、②オペレッタの授業内容と各科目の授業内容の関連についての項目の分析を行った。

## 3. 結 果

### 1) 到達目標の記述について

「表現力」「感性」「創造力」「技能」「知識」に関する記述に対して、分析対象とした12科目のシラバスの到達目標から、当てはまる記述を抜き出して表3に表した。「技能」「知識」においては、8割の科目でそれぞれ理解し、技能を修得する事を目標にしており、身体表現、音楽表現、造形表現、言葉の4分野全てで技能修得の目標としている。「技能」を修得するという点は、全ての科目で共通している。1つの分野に複数の科目がある場合には、同じ教員が主担当をしているため、各分野ごとに段階的に積み上げられるようになっており、難易度が徐々に高くなるように設定されている。「表現力」に関しては、12科目中5科目に記述があり、身体表現、音楽、言葉の3分野が目標としている。これらは、様々な活動を通して表現することを楽しむことを目標にすることで、表現する意欲に繋げることを明記している。「感性」については12科目中5科目に記述が見られ、身体表現、音楽、造形表現の3分野が目標としている。「創造力」に関しては、12科目中4科目に記述が見られ、身体表現、音楽、造形表現の3分

表1 自己評価チェックシート

学籍番号（ ） 氏名（ ）

自己評価チェックシート

	No.	チェック項目	チェックのポイント	評価
コミュニケーション	1	双方向の話し合い	・自らの意見を言うことができたか ・他者の意見を受け入れることができたか	1・2・3・4・5
	2	情報共有	・学生間で一つの情報を共有することができたか ・指導教員と一つの情報を共有することができたか	1・2・3・4・5
	3	他者理解	・他者を理解するための円滑な方法を模索したか ・他者を理解することができたか	1・2・3・4・5
備品・施設の使用	4	正しい使用	・資源を有効的、計画的に利用したか ・丁寧に使用することができたか	1・2・3・4・5
	5	決まりごとの順守	・貸し借りの記録、時間内の使用を行ったか ・整理整頓や片付けを行ったか	1・2・3・4・5
	6	利用時の他者への配慮	・備品や施設使用の計画を他のグループと話し合えたか ・場所を譲り合ったり、共有したりすることができたか	1・2・3・4・5
制作上の工夫	7	効果的な指導の取り入れ	・指導を自分なりに取り入れることができたか ・最後までより良いものを作ろうとしたか	1・2・3・4・5
	8	テーマの表現	・対象に応じたテーマの伝え方を工夫したか ・観る人に合わせた演出ができたか	1・2・3・4・5
	9	表現分野の工夫	・各分野（脚本・音楽・身体表現・造形）の工夫を行ったか ・最後まで創造的に工夫し続けたか	1・2・3・4・5
省察	10	既有知識・技術の活用	・これまでに習得した表現知識を活用したか ・これまでに習得した表現技術を活用したか	1・2・3・4・5
	11	客観的視点の保持	・自らの取り組みを客観的に振り返ることができたか ・他者の演技や作品を客観的に評価することができたか	1・2・3・4・5
	12	自己表現	・オペレッタ制作を通して、自らを表現することができたか ・表現を楽しむことができたか	1・2・3・4・5

## 《評価基準》

1…ほとんどできていない    2…あまりできていない    3…どちらともいえない  
4…ややできた    5…よくできた

&lt;自由記述欄&gt;

表2 「総合表現Ⅰ・Ⅱ」の到達目標

科目名	到達目標
総合表現Ⅰ	総合表現Ⅰでは、保育者に必要な感性、創造力、表現力、技能を習得するため、言葉、音楽、造形、身体活動など、それぞれの特色ある表現方法の基礎的スキルや知識を学ぶ。また、集団での創作活動に取り組み、多様な表現力を高め、感性や共感力を育てる。
総合表現Ⅱ	総合表現Ⅱでは、総合表現Ⅰの授業で学んだ言葉、音楽、造形、身体表現の各分野を総合的に捉え、子どもと共に表現を楽しむ豊かに出来る保育者を育成する。さらに、グループで活動することによりコミュニケーション能力を養い、困難や喜びを通して達成感や成功体験を習得する。



表3 シラバスの到達目標における記述分類

	表現力	感 性	創造力	技 能	知 識
子どもと表現Ⅰ （身体表現）	身体遊びやリズムカルな身体表現 表現することの楽しさや良さをとらえる。	多様な表現に関する感性を育てる。	創造性を育てる。	身体表現の基礎となる基本的な動きを習得する。	表現の意義と必要性を理解する。
子どもと表現Ⅱ （造形表現）	造形表現		知識を応用し創造する力を養う。	造形遊びの基礎を体験し技術を習得する。 造形表現の基礎を習得する。	幼稚園教育要領・保育所保育指針の保育内容「表現」のねらいや内容 材料・用具の使用方法や制作時の環境設定方法などの基礎的な知識を習得する。
子どもと表現Ⅲ （音楽表現）	身体全体で音楽に親しむ。 音楽表現の楽しさを知る。 音楽的な感覚や表現力を高める。	多様な表現に関する感性を育てる。 人間性あふれる豊かな情操を育む。	想像性、創造性を育てるために、幅広く表現の意義とその必要性を理解する。	創造性豊かな音楽表現ができるようにする。 保育の実践展開のための基礎的な力を養う。	器楽合奏の指導法を理解する。
幼児体育Ⅰ	多様な表現を理解する。		身体表現による創造性育成の意義を学ぶ。	運動遊び等の技能を習得する。 身体表現に必要な技能を習得する。	身体運動に関する基本的な知識を理解する。 身体表現に必要な知識を習得する。
幼児体育Ⅱ	身体活動やリズムカルな表現を通して、表現することの楽しさや良さを学ぶ。			身体運動に関する基本的な技能から応用技能へと発展させる。 それぞれの特色ある表現の方法について実技を習得する。	保育者として運動遊びにおいて安全を配慮した指導と援助方法を学ぶ。 身体表現の内容・目的の理解
音楽Ⅰ	歌唱の力を高めながら音楽の表現を学ぶ。			歌唱に関する基礎的な技能を身に付ける。 音楽の基礎力を高める。 音楽理論を演奏に応用させる。 声楽の基礎となる呼吸法、発声法を身に付ける。	音楽の理解 音楽理論 歌唱に関する基礎的な知識を身に付ける。
音楽Ⅱ	ピアノの演奏を通して表現する喜びを育てる。	ピアノの演奏を通して豊かな感性を育てる。		ピアノの基礎的演奏技術の習得 正確な読譜力を養う。	
音楽Ⅲ	豊かな音楽活動ができるように表現力を身に付ける。			ピアノの演奏技術を深める。 弾き歌いの演奏技術を習得する。	
音楽Ⅳ	豊かな音楽表現力 現場の多様な保育実践展開に対応できる柔軟な音楽的能力を身につけて保育の実践力を高める。			ピアノの演奏や子どもの歌の弾き歌いを通してさらに高度な演奏技術を養う。	専門的知識の習得
図画工作Ⅰ		多様な制作体験を通して感性を磨く。		実技演習を通じて平面表現・立体表現の基礎技能の習得をはかる。 指導上必要な技術を習得する。	素材や用具について理解を深める。 図画工作教育に関する専門的な知識を深める。
図画工作Ⅱ		多様な制作体験を通して感性を磨く。		平面表現・立体表現の基礎技能の習得	素材や用具について理解と扱い方の理解を深める。
子どもと言葉	活動自体の楽しさを味わう。			幼児の言葉を育てるための望ましい環境・活動・保育者の援助について考え、実践する。	「幼稚園教育要領」および「保育所保育指針」に示された保育内容の「言葉」のねらいおよび内容。

野が目標としている。

## 2) 授業内容について

オペレッタと12科目の授業内容についてシラバスの中から抜き出し、関連づけを行って表4に示した。発表会を行うに当たって、各チームの制作以外に必要な発表会の進行や事前準備の部分を「トータルプロデュース」と呼ぶ。総合表現の授業内容を、脚本、音楽、身体、造形、トータルプロデュースの5つに分類した。「総合表現Ⅰ」および「総合表現Ⅱ」は連続して1つのオペレッタ制作の内容になっているため、これら2科目は総合して授業内容を分類した。

既得知識となり得る内容を、各科目から総合表現の各授業内容に向かって矢印を引くことで、授業内容の関連を示した。これらの矢印を関連線と呼ぶ。矢印の太さは、細線・太線の2種類設定し、関連の強さを表した。科目の中でオペレッタの各内容に関連する内容が1つまたは2つの場合は「細線」、3つ以上の場合を「太線」とした。各分野の専門に関しては、太線になるのは当然であろう。線種は様々であるが、どの科目も2本以上の関連線がある。「子どもと～」と名称がついている4科目は、保育の5領域を担当する科目である。特にこれらの4つの科目からは様々な方面に向けて複数の関連線を引く結果となった。総合表現の、「脚本」「音楽」「身体表現（表4では身体とする）」「造形」「トータルプロデュース」の各授業内容から、関連線を分析する。

総合表現の【脚本】に向かって、細線4本、太線1本の計5本の関連線がある。太線は「子どもと言葉」からである。「子どもと表現Ⅰ」「子どもと表現Ⅱ」「子どもと表現Ⅲ」「図画工作Ⅱ」から細線がある。言葉1科目、音楽1科目、身体表現1科目、造形1科目で、4分野全てから関連線がある。

【音楽】に向かって、細線3本、太線5本の計8本の関連線がある。太線は「子どもと表現Ⅲ」「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」「音楽Ⅳ」からの5本である。その他「幼児体育Ⅰ」「幼児体育Ⅱ」「子どもと言葉」から細線がある。言葉1科目、音楽5科目、身体表現2科目で、3分野から関連線がある。

【身体】に向かう関連線は、細線2本、太線4本の計6本ある。太線は「子どもと表現Ⅰ」「幼児体育Ⅰ」「幼児体育Ⅱ」「音楽Ⅰ」の4本である。「子どもと言葉」「子どもと表現Ⅲ」から細線がある。言葉1科目、音楽2科目、身体表現3科目で、3分野から関連線がある。

【造形】に向かう関連線は、細線4本、太線3本の計7本ある。太線は「子どもと表現Ⅱ」「図画工作Ⅰ」「図画工作Ⅱ」の3本である。その他「子どもと表現Ⅲ」「幼児体育Ⅰ」「幼児体育Ⅱ」「子どもと言葉」から細線がある。言葉1科目、音楽1科目、身体表現2科目、造形3科目で、4分野全てから関連線がある。

【発表会・トータルプロデュース】に向かう関連線は7本ある。全て細線である。「子どもと表現Ⅰ」「子どもと表現Ⅱ」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」「音楽Ⅳ」「図画工作Ⅰ」「子どもと言葉」から関連線がある。言葉1科目、音楽3科目、身体表現1科目、造形2科目で、4分野全てから関連線がある。

## 4. 考 察

### 1) 到達目標に見る各科目で養われる表現の要素

身体表現、音楽表現、造形表現に関する科目は、いずれも領域「表現」を担当する科目であり、幼稚園教育要領及び保育所保育指針のねらい及び内容に示されている保育の5領域のうちの表現「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことを学ぶ科目であることから、オペレッタを行うまでに履修する科目の到達目標が類似していることは当然である。特に、「感性」と「創造力」が3つの表現分野で意識されていることについては、領域「表現」のねらいでもあるため妥当である。シラバスの記述内容を見ると、「感性」については音楽表現、身体表現で重要視され、「創造力」については造形表現で重要視されていると言える。時間芸術である音楽と身体表現は、その一瞬で表現する感性がより重要であり、形のある芸術である造形では、作品の中に創造性が豊かに発揮されることがより重要であると推察できる。知識と技能は、それぞれの分野が段階的に内容を高めていることが窺える。感性と創造性と表現力は、密接に関係しており、切り離して考えることは難しい。身体表現と音楽は感性、造形は創造力と、それぞれ注目する部分の度合いが多少異なるが、3分野が総合的に行われることで、補完し合いより大きな表現力を生むことができると考えられる。

「子どもと言葉」は、幼稚園教育要領及び保育所保育指針のねらい及び内容の言葉「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」に基づき、そのために必

表4 科目の授業内容とオペレッタ制作での必要事項との関連性

総合表現Ⅰ・Ⅱ		子どもと表現Ⅰ（身体表現）
【脚本】		<ul style="list-style-type: none"><li>ポーズ遊び</li><li>模倣遊び</li><li>（ウォーキング、スキップ、軸の作り方等、西洋的基本姿勢）</li><li>表現力、感性</li><li>ペアダンス</li><li>グループダンス</li><li>テーマによる表現</li><li>フォークダンス</li></ul>
<ul style="list-style-type: none"><li>テーマの伝え方</li><li>物語の作り方（起承転結）</li><li>わかりやすい台詞</li><li>動き</li><li>必要な指示事項（動き）</li></ul>		子どもと表現Ⅱ（造形表現）
【音楽】		<ul style="list-style-type: none"><li>様々な描画材</li><li>造形技法（マーブリング、スタンピング等）</li><li>色相、明度、彩度</li><li>版画</li><li>紙芝居</li><li>壁面構成</li></ul>
<ul style="list-style-type: none"><li>オープニング、序曲</li><li>場面を表す音楽</li><li>作品のテーマ</li><li>登場人物のテーマをもった音楽</li><li>場面と場面をつなぐ間奏曲</li><li>雰囲気合った BGM</li><li>台詞を乗せた歌場面</li><li>効果音</li><li>アレンジ</li></ul>		子どもと表現Ⅲ（音楽表現）
【身体】		<ul style="list-style-type: none"><li>保育教材への音楽付け</li><li>音階、音程、和音、コード</li><li>言葉によるリズム遊び</li><li>コード進行による伴奏付け</li><li>アンサンブル（小楽器の使用）</li><li>簡易伴奏</li><li>曲の表現</li></ul>
<ul style="list-style-type: none"><li>気持ちを伝える表情</li><li>役柄の個性を表す動作</li><li>気持ちを伝える動き</li><li>ダンス</li></ul>		幼児体育Ⅰ
【造形】		<ul style="list-style-type: none"><li>鬼遊び</li><li>鉄棒、マット、跳び箱等</li><li>ボールを使った遊び</li><li>リズム遊び</li><li>日本舞踊</li></ul>
<ul style="list-style-type: none"><li>場面を表現した背景</li><li>場面を作る大道具</li><li>小道具</li><li>衣装</li><li>照明（色）</li><li>パンフレット</li><li>ポスター</li><li>案内状</li></ul>		幼児体育Ⅱ
【発表会・トータルプロデュース】		<ul style="list-style-type: none"><li>ダンス運動遊び</li><li>リズム</li><li>集団ダンス運動遊び</li><li>縄跳び</li><li>フープを使った遊び</li></ul>
<ul style="list-style-type: none"><li>リハーサル</li><li>幕間</li><li>発表会</li><li>受付、見送り</li><li>プログラム</li><li>挨拶</li></ul>		音楽Ⅰ（声楽と理論）
		<ul style="list-style-type: none"><li>音楽理論（楽譜を読むための基礎知識）</li><li>基礎発声（姿勢、呼吸法）</li><li>リズム、拍子</li><li>表情豊かに歌う</li></ul>
		音楽Ⅱ（ピアノ）
		<ul style="list-style-type: none"><li>ピアノ（バイエル、ブルグミュラー）</li><li>楽譜理解</li><li>曲想表現</li><li>課題曲発表</li><li>発表会ごっこ（課題曲発表リハーサル）</li></ul>
		音楽Ⅲ
		<ul style="list-style-type: none"><li>ピアノ（ブルグミュラー、ソナチネ）</li><li>楽譜理解</li><li>曲想表現</li><li>課題曲発表</li><li>弾き歌い</li></ul>
		音楽Ⅳ
		<ul style="list-style-type: none"><li>ピアノ（ブルグミュラー、ソナチネ、ソナタ）</li><li>楽譜理解</li><li>曲想表現</li><li>弾き歌い</li><li>演奏会</li></ul>
		図画工作Ⅰ
		<ul style="list-style-type: none"><li>道具の使用（はさみ、のり、ボンド）</li><li>紙で遊ぶ</li><li>粘土で遊ぶ</li><li>人形制作</li><li>グループによる制作遊び</li><li>描く</li><li>グループ制作巨大壁画</li><li>展覧会</li></ul>
		図画工作Ⅱ
		<ul style="list-style-type: none"><li>羊毛人形</li><li>布製玩具制作</li><li>紙バック制作</li><li>木工</li></ul>
		子どもと言葉
		<ul style="list-style-type: none"><li>絵本読み聞かせ</li><li>児童文化財</li><li>紙芝居制作</li><li>紙芝居発表会</li></ul>



要な保育について学修する科目であるため、表現力については3つの表現分野と類似した到達目標となっていることが分かる。言葉の持つ豊かな表現力は、人間が生活するあらゆる場面で必要である。「子どもと言葉」の到達目標から、表現力を高めるために「技術」「技能」の重要性をより強く意識した科目であることが分かる。「自分なりの言葉で表現」するためには創造力が必要であり、「言葉に対する感覚」は感性の具体的な内容を示しているため、領域「言葉」は、領域「表現」と類似したねらいを言葉という表現手段を用いて行うことを内容として重視している。領域「言葉」を担当する「子どもと言葉」においても、「感性」および「創造力」の意識を到達目標に反映することが表現を統合する上からも望ましいと考えられる。

## 2) 授業内容の関連

本来、各分野は独立したものであり、科目内容は、各教員の裁量によるものである。異なる分野の科目間で授業内容を連携して実施することは、比較的珍しい。表4を見ると、各科目からの太線は、総合表現の各分野の専門的な授業内容に向かっている。この繋がりから、総合表現の授業内容は、それぞれの科目の内容や分野が統合されるための科目であるという本来の姿を的確に知ることができる。表4に示している「音楽Ⅰ」から総合表現の授業内容「身体」への太線は、音楽と身体表現が関連しやすいことを示している。形の無い芸術表現として、繋がりが深い分野であると言える。

トータルプロデュースは、保育現場で行われる生活発表会や運動会などの保育行事に必要なと想定される要素をまとめたものである。例えば、生活発表会では、会に参加した全ての子どもや保護者が会全体を通じて楽しむことができるように、会全体の環境構成を行う力が必要であり、この力は演じる側ではなく、見る人の視点に立った見方に基づく力である。トータルプロデュースには、言葉、音楽、身体表現、造形の4分野全てからの関連線がある。そして、12科目中7科目から関連線がある。トータルプロデュースに比較的関連が強いのが、音楽及び造形表現である。音楽は、演奏会形式で授業の成果を披露するため、リハーサルやプログラム等、発表会に必要な要素を授業を通じて全て体験している。このため、トータルプロデュースへの関連性が高いと考えられた。また、総合表現は、造形表現の要素も強く、パンフレット、ポスター、案内状の作成は、「総合表現Ⅰ・Ⅱ」の授業内容【造形】に含まれているが、一方でこれらは、内容を知らせるため

の媒体であり、【発表会・トータルプロデュース】のプログラムと同じ意味合いを持っている。このように、トータルプロデュースとの関連が高くなる要素を造形表現が持っている要因は、視覚的な形の残る表現形態であることが理由であると推察される。運動会、生活発表会などの保育行事には、ポスターやプログラムなど、視覚的にわかりやすく情報を伝え、雰囲気伝えるための造形技術が不可欠である。同様に、言葉もこれらの視覚媒体には不可欠な要素であり、トータルプロデュースに関連する要素があると言える。トータルプロデュースには、個々の科目の到達目標には具体的に挙げられていないが、保育者としては不可欠な内容であり、各科目に関わる教員が高い意識で取り入れていることが窺える。

オペレッタは、音楽表現力を育てるために音楽担当教員が科目内容に取り入れている大学が多かったが、身体表現、造形、教育学など、他の分野担当の教員と共同で行う大学も増えてきた。長根が、「あまりに広範囲な学生指導が予想され1人で続けていくことに限界を感じる」<sup>1)</sup>と述べているように、オペレッタを完成させるには、保育を行うのと同様に多くの内容に取り組む必要がある。それぞれの内容に対して専門的な指導を行い、学生に関わる教員の人数を充実させることで、学生の修得できる内容を豊かにすることができる。本学科では、身体表現、音楽、造形、保育学を専門分野とする教員が、総合表現の担当教員としてオペレッタの内容を概ね等分して、責任も同等にして科目運営を行っている。表4に示した各科目の授業内容は、各教員が学生に保育者として必要な内容として、それぞれが取り入れている内容が大半であるが、教員間で話し合いながら行っている部分もある。科目間連携として児童文化財制作を行い、発表会を開催することがそれに該当する。これはオペレッタ制作の3分の1のグループ規模の少人数で実施するもので、物語の作成から発表会までの行程管理、他人に観てもらうことが一連の内容となっている。これは、オペレッタ制作から発表会の開催までとはほぼ同じ行程となる。総合表現は、文字通り領域「表現」の全ての分野の知識・技能・思考を統合して演習を行う科目である。香川(2013)は、オペレッタを保育者養成におけるプレゼンテーションの1つとして考え、プレゼンテーションに必要な発表能力の育成について述べている<sup>4)</sup>。その中で、他科目ではどのようなことがなされているのかを理解した科目間連携が起点となると述べている。本研究でオペレ



ッタに関連のある科目について担当教員が科目間連携を意図的に行っている点、および、統合される各分野の特性と保育に不可欠な要素であるトータルプロデュースに対する各分野の関連性が明らかになった。これらを踏まえ、自己評価チェックシートのチェック項目「制作上の工夫」「省察」のチェック項目及びチェックのポイントについて、学生が効果的に自己評価を行う事ができるように検討していくことが必要である。

## 5. 今後の課題

自己評価チェックシートには、今回取り上げなかったコミュニケーションの項目がある。武岡（2010）は、多くの人と関わり、一緒に作り上げていく過程での経験が人間のあり方、生き方に影響すると述べている<sup>5)</sup>。そして宮本（2007）は、オペレッタは協調性と団結力を養う格好の活動であるとしている<sup>6)</sup>。オペレッタを通して育つコミュニケーション力についての検討は、今後の課題とする。

## 6. 文 献

- 1) 青井則子，入江慶太，秋政邦江，尾崎公彦，伊藤智里：総合表現（オペレッタ）における授業開発－学生の自己評価と教員評価の差異の検討－，川崎医療短期大学紀要33：55－60，2013.
- 2) 秋政邦江，尾崎公彦，青井則子，伊藤智里，入江慶太：オペレッタ授業の身体表現分野における自己評価項目の選定，日本保育学会第67回大会発表要旨集：883（P144023C），2014.
- 3) 長根利紀代：保育者を目指す学生への授業効果について－オペレッタを教材として－，名古屋柳城短期大学研究紀要26：91－107，2004.
- 4) 香川晴美，鈴木正和，佐藤潔志：保育者の専門性としての発表能力とその育成－「保育・教職実践演習」を核とした科目間連携に向けて－，山陽学園短期大学紀要44：8－19，2013.
- 5) 武岡真知子：保育者養成における音楽表現“オペレッタ”の意義，富山短期大学紀要45：33－42，2010.
- 6) 宮本智子：保育者養成校におけるオペレッタ授業の効果－表現力の観点から－，国際学院埼玉短期大学研究紀要28：19－27，2007.

